繪本琉球軍記

初篇

七

へ13
3554
7

門 へ 13
號 2554
卷 7

早稲田大學図書館
昭 33.11.10 購入
藏書

繪本琉球軍記卷之七

目録

要溪城落著
橋久智智計欺魏伯
舟手諸將攻取唐洲城
佐野帶刀再爭先陣

郡政曹起出張清風嶺
清風嶺下伊集院戰琉兵

熊本藩軍法巻之七

繪本琉球軍記初篇　巻之七

要溪城落著

寛永縣令花熊ハ日本勢ハ近くまで遠くまで縣程ハ近くの四
門を固て防ぎ戦ふとも和種ハ多大猛勢を引き四方を圍
書を進で攻うれバ花熊大ハ地をれ逃もけまどゝやゝ思ひ
勢をつて惠つゝ逃まるとのがさじと薩ハ勢羅て進るゝ浜
田沢長兵衛元来業凶者にして此勢の中かくろうるとて
其さ紀ハ進て大音あゞ猛将花熊ハ初めやれ八日本
の未曾人なるぞ引取て猛負せんと戦まなぐう討てうれ
花熊そもそも逃きぬ不とゝひかを打ふう馬を取てうう

喜田忠五郎
門を破て一番
乗の景

二三合戦いしが浜田次郎兵衛雲威を振ふて迅力ふ荒武を
るより切て落し首を取てれば種ヶ嶋殿ふ尖
をかけて一同ふ焼立仲集院と一まふ合ふ兵を進て要渡
瀬の本陣ふ責うるふけしふ紀伊中ふハ弦殷ヶ兵と日ふ勢加
納吉崎猛田ふ勢と蕭ふ戦ひる由へ門をかる勢雪てふく
空陣同様ふうれバ日本勢大進をんて陣つを打やぶり城
中ふ乱ぶいる守ふ切てまいぶ先往より戦いー加納
吉崎ヶ嶋ヶ先ふ入て大ふ力と侍往ふ弦殷を打破ぶ
弦殷ふ勢を引て本丸ふ揃籠り四門の固て防ぎ戦うふ
種ヶ嶋仲集院ふ先を引て先彼百家人の糸沢をさ白ぐ

ふ入を付て恐下ふ立て後二万余ふ大軍遠
ふもふく四方を圍ふ浜辺をうちくるる雨よりしげく
皆ふ時ふ責落さんとて揉ぶうされども城中ふ立ふ糸を
ふく大将弦殷士卒をかふ知て防ぎる由へ高ふ大ふ
ふうふくも去ふ右ふく高ふるふ大ふ五ふ法
を元ふ陣の来るをお待ふ結ふふちどふく仁木武義ふと
ふぶふ熱勢のふ沢陸ふ上りーかども猪氏ふ軍令嚴
ふて大軍御ふ法をふぶ命をかてかーふも孔明ヒぶ
ふふう武義ふる猪氏法ふ知ふを待ふ味方の軍兵ふ
中の労をいれども休ふ休ふ出ふーをやくふ恐を

のみならず兵粮を費しよて先兵糧を分行をつらく
前に陳文碩に積へさせし演蔵を見て是を各隊
隊に分るに凡一人の飯米一日に八合とさだめ是を万余の
軍勢一日に費る事八百余石なりそれが一ヶ月の間糧二万余
石なりといふとも諸津に於て一日に千石を積り石は五千石は
五日の兵糧に過へず依て兵糧は軍中第一の物なる故
諸氏計を用て先送る道なし扨なり諸氏又蓑加村
に到りて是らの兵糧を運送させる者なれども仁來武
礼なるは諸軍勢に不知をつくし渓澈の本丸で千余十
余人を囲　去二十三日に来る先陣の大将係集浣

忠棟諸軍をとゞめし当所に来りて城表の宰相ちかく其後
を見せて琉球今突きれすと甚くらけて攻の手をくだいさへ
いさゝ切る薩摩勢良ふ土卒にいる迄まれ共くまでと
雲之進は鉄砲をうちかけ火矢をとばし共を紀州んで
責かゝるされども無双の城郭じろは山をに兵粮を
更に要害厳重堅固なるに今此城より守る鄧殿と
いふ者先切して大将をは徒五士従卒八必死と覚悟を極
めて八千余人構籠り矢石を飛しきびしく防ぎ戦へ
ば寄手紀人手負多くして容易に落城しべくも見えざりし
南の表口に向ふる二階堂忠通が良ふに種田忠右ゑと

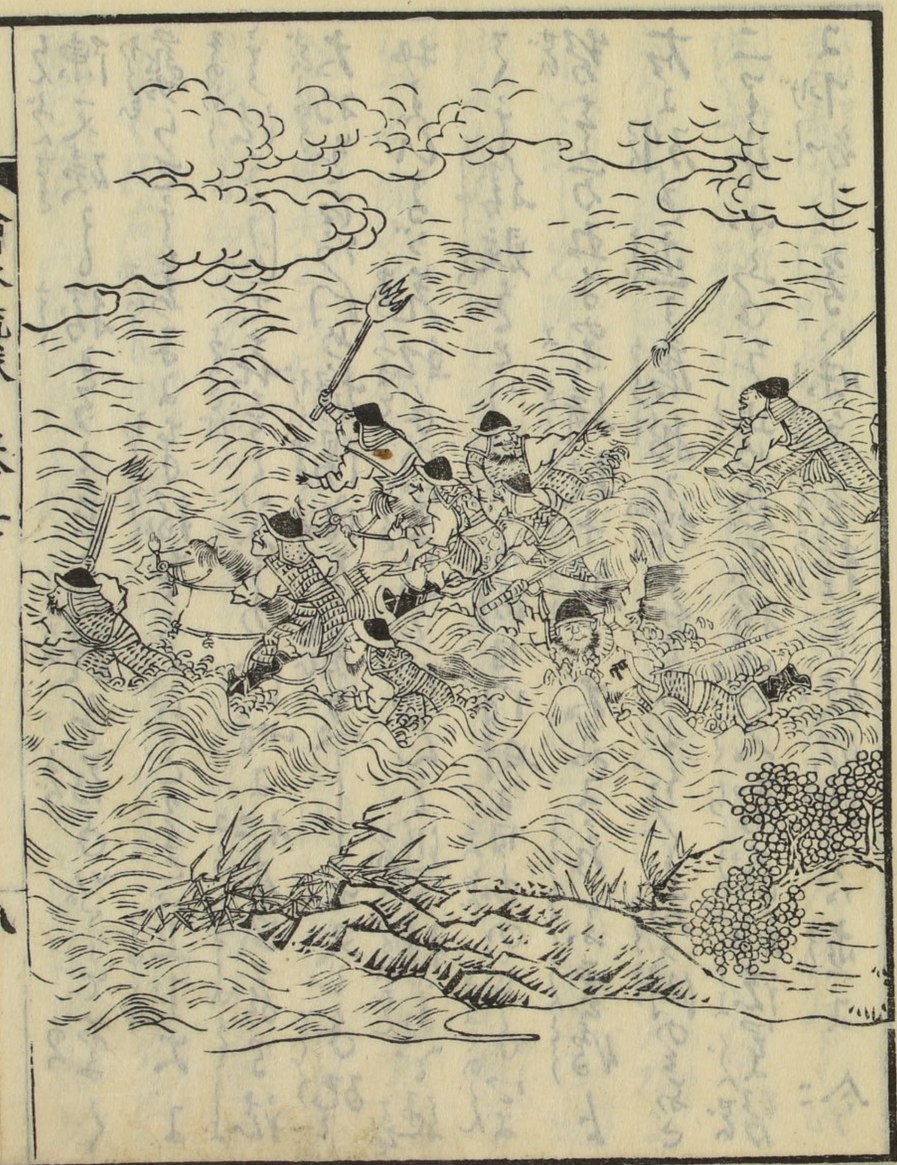
云剛こ矢たのまこ作たぐとうぐと持右こまこ大る斧
を持彼仲たぐとうつこ元くる矢をうけ流し城門進
むくとまこ寄門おこ向ふくく斧をうりあげ殺こ打うう
こまぐさも堅固の鎖つ忍引元ううる赤田ぬたつ大音
こて西城こ一まこふと呼まう斧をふうて城中こ切こ入まバ
元をうこてまこの大軍一同こ向を作うまれあドと城中
こまこの先こうぐ物てまこるか大勢強殺法をを激し不
配こまて戦ぐる早日本勢西方より辺へ味中こ落こられ
こ強殺今いかいぐくとうい味ここ向てる元来西城を
たこち勢今の援兵を待こ堅固こ籠城せんとこひし

こ運元こて城こまう生て主人陳吉尉陳文碩と尉官位
うんこること恥まこ討死して名を万世こ伝んこ終こ多勢
を引こ村中こ立まる薩摩勢こ中へ西こふこ切て入西る
を寄ひ四西八方ふ切こ点こ落こ戦ひこ殺ひこ殺がしこま
大膳こまこう合せ合ぐうこ戦ひこるふ一力こ切落られこまぐ
こまこの士卒式こうれ又ハ降参して城中ハ一静りうれぐ
仁木武義こる入来り法度を制こて乱場を鎮め法をせ
こ民をかんぐ一様んの貢を赦しこふバ百姓歓喜して
こ陸を感ぐこ紀こ建久八年四月廿九日こ日の合せん
城美の高名赤田加納南崎

桂田うくめがくい先ころの功労を称し給へり私
に舟大工ふるを金銀多く給り種々の物品をとる
遣りて薩州へ帰し

橋久智智計欺魏伯一

扨も仁木武義ハ使者をもつて本城平均を天
守へ言ふ一旦城中へ詰しかれども久大ひよりこび
籠むの勢を率て陸より亜ふ要害漢瀬の本城へ
法螺と称ぎくい加納演田糸田中傷うるぐらを石て
ふくくの功労を称し又張殷信ハの分をしてよく
城をやうもを拵して討死せしとふくいこそ



檳榔智計魏伯を殺る図

陳文演、こも猪まろと云て死罪を免ひ、ぶ〜して帰く
義らせこと書るよ孫をもくらをまこば上下大よ
こと法をとんて赦ぐこいふこの時よ仁木武義方法
大将をおけ〜め揚陽城を責ぐべ〜こそ又こと砲と
却ぐいるぐ先祖よの家いぶたんと遣こ使者と絶
くこと猪敗をとい〜めいる同月日時よ日本のあよ
勢まこ方五よ家猪牧十艘こ大あよ雲猪よ
右こ別を恵こ唐船こ拝よせるよりこ唐洲のこあさ
二こ斗小ふよを止め恵大将猪久智武紹法宣船
こ下ぶ〜いる小味方云糧を使以終ふば恵よ今

青責うるべ程孫せが歎ふ防禦ぐ使へあ〜ん志ぐもけ
城を出る大将魏伯と云者万夫不当ぐ勇士とこけこの
ら〜め汁を没けぐ味方ぐ換亡まくべとて法大将よ
汁と示〜先陣二隊の兵卒と申り紅中よ〜ぐ義火と焼
陣よ出ぐ体よこせ書よ逆兵あよ余勢とさぐと闘者
こ下て城の楼へ押寄る拝ぐ唐洲と云周回あ十里六十
ふ〜て中央よ一ぐ城ぐて荒い渡こる海と常てこ〜ろの
岸こる心より方よい岸こ〜ぐ歩こ通ひ
ぐ〜ぐ只右ぐ方よ〜ぐ城下ぐ町家ぐて焼こ
ぐて船より火ぐ命ぐて城云と防ぐ用をと城中よい船

まろり書兵さへび東は角樽より七さ縄と海上さまりをさ
ゆるとつけて用ふと嚴書まれ元来國主の命るゝといへども
東風平は強書るとゆ謀士又い大史亟李参ホゞ李ゆく
兵丸は起こんゆと知り書ゆ諸書は按司ゆ命じてうくい
さびゝく用ふとるさゝむりはこしあもいつものごとく書云
ホ城中と夜ゆりゝるゞ勿ら多くは籌大二里だうと
沖の方ゆへられば大ひゆ繋ひてけよゝと魏伯ゆ翔び魏
伯大ゆ怪ゝゝ角樽ゆ上月て是とそ中るいけ舟をゝ
夜討の欲舟ゆゝゞゆ遠ゆ交来るべきゆ却て沖よとゆり
るい宮ゝく海城は乱るべゝ売挟殺とひゞうせ紙云を

おびゆりせとてさゝゆ繋ひく気色見繋ゆ大い火弟くゆ
減じて沖のうへ引とる体ゆへられば魏伯大ひゆうゝひて
是海冠ゆ遠ひ色いで追ちゝて慰さおせよとて自ゝ二
ゆ余繋は兵と卒ゝゆふゆ松明と秉我先ゆと城と
うけ出用ふは軍舟ゆ元のり樽とおゝ波と平ひて追うけ
ゆくは同伊勢内義興い樽久智民紀ゲ斗とうけ遣云
ゆ余繋と引卒ゝ城ぞいちりぐゝと書るゞ国おは夏ゆ
城云を上ゝ紙と押て出めゝひとく係ゆどゝと用ふ
ゆゆと作ゆと垂二垂二ゆ陸ゆこだつけ敷るは松明一日ゝと是
城門ちゝく責上ゆまび城中大ゆさりぞそもは云何延より

来り〳〵やとよとゝへと問章〳〵防んとする去一人あり

舟を諸羽唐洲城責取

扨も唐洲の按司魏伯い樁久智氏紹が計を聞り二千を

うり舟とゝせーあるよりいもよりゝ後より周の妻起り救ふ乃

松明一回ふとりつまを塀まを向ひて責うる体あるりられば大よ

撃るゝと紹と返〳〵て能くまを樁久智まるふかくとゝる

より一回は周と偽り法軍と下知して退うけ来り後より

魏伯が勢は嗜つまゝ進んで打てうまを塀云義後は

敵とゝけ猛烈周章であ中へ切て籠さるゝ去うゝまを

されども城は魏伯い味方付ゝとも力ゝ城は魏

し敵と退ちゝさんと急よ紹と強よこゝつけ後よ兵士二

百続ゝうり魏伯自〳〵出ゝを薩兄勢は対てう

ゝ勇とふふく戦ふり伊勢内義典るよつゝ立大音

りげて魏伯と対とり者い中一の功名ふそるへ大きゝ言上

して恩賞は那〳〵りんと成りられば伊勢が兵ホ川門

先を内実中亘大左力と責向ようゝ一左右より魏伯は

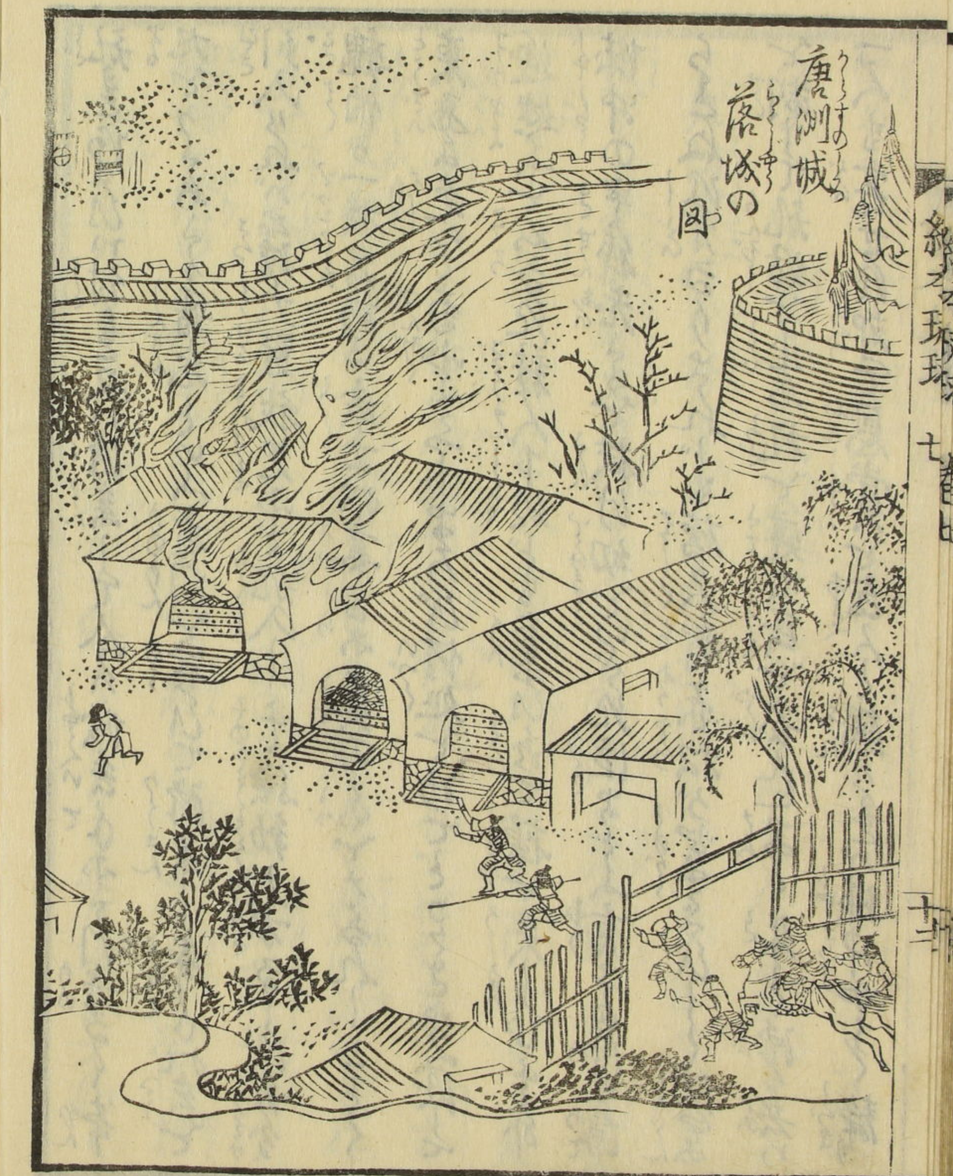
討てうまを魏伯も中の勇猛へ二人どわは責〳〵

は落は日本勢樁久智赤松伊智地業琉球勢ことゝ

く討とり中は陸は上り伊勢内義典と一よ和りは後の東

南るの岸より火とるちり周と偽て責上まを塀名も巳方と

堅めて大なる防げども折ふし東南の風烈しくして大城
内よりは寄せ寄せ大度ぐりられば城去ひよ難きさま
ゆゑ防禦の武勢もすく大を打滅さんとせるおとといさま
進さし薩摩勢は巳門より乱入し降る者は助くべしと奏く
よ降り所をしまくまべ城中の者ども降参せる者
大まり計と見て大将魏伯は当城外よ有て伊勢家乃二士
に川実本と戦ひしが城中の内のよとえて陰法術こぐれ
るを元来に川実本は名を知し剛の者なれば益精神加り
魏伯が孫の子孫丸を亦と付へく縫るくるよる切てあと押
へく首をもぎりり大将かくれでくりられば城去まんく
丸をひろい付きをひい降参して今は城去ふ門者ども
丸をとりあくる番元とて門を開ひて降参し寄せ去と
門入られば薩摩勢我先ふと乱入し手強勢大方るべ
魏伯が一族名ある武士は妻子お奥のあとをるれしでく
案ずるを主の者少ふまろび何処をいてとうさまべして
逃迷ふと人ある見雑人下級ども奪ひ取て操と失しむ手ふ
城中の半病先ると枝け幼とい見注ぎふ有さる月も過
らまねば平ぎりさんども格久智赤松が堅さびしく陣堅
を制して乱妨と止め扎と建て民と安んじ多く来く降る者い
一人も害せず却て恩賞とをんと解るまべ城中中く静



唐洲城落城の図

子年の冬年の堺下代皮百姓と引き籠り隠れ居れば稽久
智大よ再び問ことごく引出拷問へ一年の貢と申上るまば
百姓ども大よ再びいさきて河内へ加くて唐湖の家陳の後
びりれば山よーよるとひく大の久よ云上ーられば大久
ふよろこびよ遠諸大名の功を賞ー御一族志ケ美大家乱
新宮と崇ー偏よ唐湖の城とやーせ新くれ法名いよく云と
きをめて西平城と表とるべーと命ぜる是唐湖の籠城
せー青るりりて

佐野帯刀再争先陣

建久八年十二月廿九日の夜仁木武蔵守勝氏法大名と

陣よ集り和よ七法名唐湖と表と思るりと示ー千度よ中るい
今青来ぬより雪よ軍馬とすりて穂陽城よ表かるべー
山岳よ一ツ城あり岳を清風嶺といふ山高くして道けい
ーくた右ふ樹木生茂ー一夫岳をされば万卒進てこの山
といふべを地名り我名ふよ欲兵ーるーれば実とやーんとを
べーのー山地と欲よ示ーれていい味方ハ軍卒進むるまぐ題
山路よ出欲よ出遠く山岳と表えべー後ろ今和光進で
山岳と示べーやと進中とんーいひりれば伊周院大棟進
みりで某形くべよ勢と引くまよ今青清風嶺と表ーりハ
べーとりよ表まぐ納くざるよ佐野帯刀引と抽んでやけるハ

某ハ〳〵ふせぎ戦い清風嶽より向つべしと申されれば右様名護
屋一番カヨ向て〳〵やるい御名ハ是を第六隊の備流れ即ち
先鋒の為軍ゐり箇様ゐる時ふこと先ふ進んで敵よりられ
何ぞ所〳〵にて人ハ後ふ下りんと申られれば常力怒て申けるハ
今青清風嶽より向い是一ヨふく先陣といふよりハ此
軍一回ふきゝむ〳〵れいらふれ法才先ヨふ向ひ多く義ヨ軍
勢ヨ配ヨの同脱ヨ軍師の義ヨ為めて先ヨよりされヨ向
うんゐと申ておさゝり是飛く此後ハ役目某ひヨ勧中
さんと勇気と含んでやられば伊周院さゝふ安心軍て安
ぎりられば勝氏二人ヨ向ひて中るハ御名達中名何まも

志を抜ゐれヨ向ひ氏きられば何まとそれも定めゝ〳〵来ハ
天ヨ任て是と定めん清風嶽の傍十里ゐ去て一ハ城
ハ是と金門城と名づけ惣ヨハ按尉張英といふ者れ
ゐる是り清風嶽ヨ軍ハ〳〵ハ張英ハ東門を味方れ
後ゝ〳〵人為〳〵是を拵ヨ〳〵御名両人寵を〳〵ゝ国
ア〳〵方ヨ向ひの〳〵是ヨ天ハ命ずゐるれば互ヨ意服ゐ〳〵人
と云られば二人後ヨ是ヨ後ひ寵と引られば伊周院と清風
嶽ふハ〳〵り常力ハ金門城ヨ向て人名ハ用云と
ゐ〳〵夜ハれハより出立て伊周院ハ清風嶽ヨ向ひ常力
ハ金門城へと向ひ

部政曹起出張清風嶽

却て従要溪灘に紀方陳左尉文積い妻子一族と打ちく
往下に大将曹起よ此しまよりく和兵の国と切めけ迫く
に仲おく穆陽まで逐来るとく門をひらくべしと呼ばりけ
まび城内へむくへ千容と
まび城の張殷旦怪しを見るに先城内へむくへ千容と
同ゑれば陳文積文息徒で中るい計ざるに日本勢教美
に大軍と起し不意よりけ国へ押よせ来りる大急なる
夜来防ぎ戦るるのりさいび是れるくけるを引ひるり先
けよりと却ふ迫進し公望と力と合しふくび要溪灘を
えくし妻子どもと殺よべしと云ふれば張殷大をあどろに

こい大変ありして先郷へ五馬ととぎせく接いこい倭城
本ふ船と出し合戦の用をまりくりかくへ部政くび
一騎馬と乗して陳文積に迫と去くかけ来まり陳左尉
大よ呼び我軍ふ汝ガかく中で高い強るを去くび用ひざりし
るりこと悔しくれ汝ぶ今日の働を後ふ左くへの道ふ就ふも
ガびと称しふ要溪灘の裏を回ればれ部政中るい来すで
和船に乗人とおよくく皆くい弱ひくらども迫も可こざるを
左尉ふ迫付位をしひくんと思ひくらども城中の
るんりとるくよりく日本勢と迫ちし三里ばり義のび傷
るふのびりこをまび城中ふ大ひよ上りれば色急るぐく

陳文碩
穆湯之
破走
の図

山とり囲び海辺ふ出さく岩ひよ要害設け敵卒三百人
さんぐよ多く迎撃りゆくべ要害城に指よと同られば彼敵
軍ホ蓋べく要害城とでふ岩城して張飯も討死し義を
者尉の篠井も已よ敵れるよ敵されのへりと中れ山中るよ
某らで一統来練よい仕れども左尉の山辺とちくしく義を
ゆと云られば陳左尉殿とちて大よ驚きとるげ妻子みれ
るものく思ひつづけ兵義憲ひよ流てさくよ源の統くひま
もるー叔も南城の桜田趙殿の要害城の岩城とちくく安
うーび思ひ義よ法ると切めいぐ計と用ひて日本勢と防
ぐべきやと詳しられば陳左尉の臣下曹起ちて出く申

るハけ西中で敵とうけて戦ひよ利ひるもど清風岩の地
とるふ左右山ちくして樹木義で道険ふてるい猪と並
べる敵ひび不得一夫ちとられば万軍進ぐるーとふ
べき義和ゆり今二人の大将とるーを要害ふうりく陣屋と
造を望くちるりく敵を禦ぶ日本勢勇るりとふも一人
も進むよりくひび後よい意屈して能く退くべーチ様よ
ちーびて味方ホ云退討よかるとるび勝利と決んる疑ひるーと
ひられば清水ちて向つく山西とちくんとひ
られば部政ちてて出某那くバ曹将軍と曹起と一千猪の
勢と引く清風岩とちるべーと云られば趙殿大ひよ喜び

那覇より逗留一ヶ月百騎と号し御政曹起と大和〳〵と
清風嶺と号し〳〵む二人御ん出で命をとりけ要る清風嶺
ふ寄り山の岩より陣をとり日和勢今や来りと待ちけり

清風嶺下伊周院戦　琉兵

扨も伊周院右様いる勢ちぐつく三ヶ金斬引軍し要
渓澤と出立し息をもつぐせば軍るとあり〳〵ぐ四方ぬけ
清風嶺の様ふ〳〵り先兵候と巻して山上の宮ゑと
せしむるよ兵侯立ゆ〳〵やるいよ山上より敵の軍兵
多のハ知ば少へども要害ゑ陣をとりやられば伊周院
大ゑ驚きさられば〳〵て軍所の様ゑ遠ざ敵兵ま

陣をとりまるのつゑをいけふすぐ出れども常力と強し
るもりつればいろふもして今あれ内ゑ山上ゑ敵を追ち
し素智勇ゑなどとりて〳〵ゑ味方ゑ勢をして〳〵ゑ穆陽
ゑ向ハしゆんと思ひられば自〳〵座麦の兵号ゑ人と引き
つき像るふ〳〵ゑ丘ゑ上りて清風嶺の形勢をみるふ号
岩〳〵と聳へて険山屏風のごく中ゑ一ツ細ゑられども
只一騎うちゑ坂ゑ登りゑ山切ゑ大第石施と倚へ要さ
日和勢麦上〳〵ば一図ゑ打ちるゑさんと待ゆる体るりられば
伊周院安り〳〵ば只〳〵も先一合戦すべ〳〵と廿九日の周敵
ゑ〳〵ば〳〵と岩と号んで麦上れば敵兵ゑ〳〵もこれと

伊集院忠揀
清風が嶺の敵陣をうつる図

知りてさぞと辞すりかへつゝ日本勢とゝふまよ引よせれ
図と見へゝ一まの狭地とひぐらせ敵百挺れ石火と一日よ
どりと切てを色畑の中より琉球勢切されてりよ打てり
きび薩兵勢勇るりとゝへども手釋間まぐゝく付てりの
敵去まれ逃て仕まて撃すて退義されけ変ゝく他と立
逃し伊周院ら勇民中村隼人安部義内ホ摩利支天の
ぎゝるぐゝく近よる敵と八方へ切ちし大音よゝく味方よ白ひ
汝ホ山あゝく命と拝びんび味方大敗軍とおるべし敗やく
とゝはらて下ら也近び勇とふゝふく血戦すれば薩兵勢を
よ激され勇乱たゝるよ十倍し賜ゝる琉球勢とさんぐよ

切倒せば敵ゝたゝめ勇乱よ仰げるゝく山上さして逃よきハ
伊周院ら株馬よつて立来配打ふり諸軍と激し敵ゝハよ
引ゝよゝるて付へゝく山よ退のぐて岩の要害と攻乱
と味ふり自ゝるとゝ乱してせよるふ敵ゝ勇猛御敗大ひよ
知ゝを長ゝどゝと賜る軍と不甲斐る味方ゝ奴系逃ると
ゝ法やゝる系よつけと味ふれ敵ゝ愛ゝてゝく吼ゝてゝくれく
大将伊周院と同げ去二去三よ切てりきい右株大いう
ゝあゝゝ小豊め汝先ゝもこりゝよ敵ゝ敵ゝ二百兵命と
失ゝん為ゝと大ひよ味ふり切ゝくきバ元来云使通ぜれ
琉球御政同義よも及ぶ敵ゝ合切さゝより大と出ゝ同

うつると戦ひうちとられぬる流兵い薩兵勢ひ勇ましく敵をうち
ちらすふせぎふせぎ山上へ迎ひてまび郡政も是を見るく法
軍を引つまをぶ上へ引元ゆけば薩ア勢是を追て山へ上ゝんと
をる所へたどめより出る曹起士華ま下知して薩ア
勢ひ中へ多ひ勢ひ一回ふーりれば浮間浪是をとゝらく迎ても
山上の攻とりぐ元と知りられば引ぐよと呼ーて軍をおさめ窮
鼠知ゝ猫とたむ今ま伴ま夷上ゝんとせば味方ひ捨亡おい
ゝんとを法軍をふひ捨ま陣をとしまるを飛ーてけすと
要渓滝へ進ひ

絵本琉球軍記巻之七